

Title	死の不安およびその他の情動に及ぼす「死に関する」情報の影響
Author(s)	尾崎, 勝彦
Citation	臨床死生学年報. 6 P.29-P.38
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11681
DOI	10.18910/11681
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

死の不安およびその他の情動に及ぼす「死に関する」情報の影響

尾崎 勝彦

Key words : 死の不安, 情動, 実験, ビデオ, 中高年, プリポスト

1. 背景および目的

死の不安は、様々な観点から研究されている。性格特性との関連を調べた研究 (White, & Handal, 1990-91, Abdel-Khalek, 1997など) や、尺度作成、評価に関する研究 (Templer, D. I., 1970, Abdel-Khalek., 1998など) や、デスエデュケーションに関わる研究 (Davis-Berman, 1998-99, Comb, 1981など) などが多く見られる。しかし、これらの研究のほとんどが調査的研究で、現状の心理的状态、心理的構造を把握するには適しているが、その構造や状態が、いつ、どのような状況下で、いかにして変容するのかを見出すことは困難であり、それを見出すためには実験的研究が必要不可欠である。しかるに死の不安の実験的研究 (Oranchak & Smith, 1988) はほとんど見あたらない。そこで、本研究では、死の不安に関わる実験的研究の一つとして、死に関わる情報を与えた場合、および与えない場合に、死の不安やその他の情動の変化が表れるか、あるいは表れないかということに関する知見を得ることを、その目的とする。

2. 方法

2.1 実験日時・場所および状況

実験は2000年10月～11月にかけて、行われた。学生被験者に対する実験は、大学構内の一室にて、また、中高年被験者に対しては、被験者宅、実験者宅、被験者の知人宅、および公共施設の会議室にて行われた。一回の実験における被験者は2人および3人とした。

2.2 被験者

学生被験者として大学生および大学院生44名 (女性23人、男性21人、 $M=20.7$ 、 $SD=1.7$)、中高年被験者として50歳以上の中高年者45名 (女性23人、男性22人、 $M=63.4$ 、 $SD=7.1$) を採用した。

2.3 実験装置・実験課題

<実験映像および統制映像>情報を与える手段としてビデオソフトを用いた。死に関わる情報を含む実験映像としてBBC制作「ハービーやすらかに」を、当該情報を含まない統制映像としてNEC制作「Lavie Nxのセットアップ」を用いた。実験映像は末期がん患者の死とその家族等との交流を描いたもので、統制映像は、パソコンのセットアップ方法を説明する

ものである。いずれの映像も20分に編集した。なお、実験映像は、予備実験にて、3種類の映像の印象評定の結果、決定したものである。自分自身の問題として捉えられ、かつ、「気持ちが悪い」などの付加的な情動反応を喚起しないものを採用した。

<実験装置>映像を提示するモニターとして、学生被験者に対しては、21インチのものを使用し、中高年被験者に対しては、実験映像で19~29インチ ($M=23.7$, $SD=3.9$)、統制映像で19~32インチ ($M=24.0$, $SD=5.1$) のものを使用した。

<実験課題>死に関する情報を含む映像および含まない映像を提示した場合の、映像提示前後における情動および死の不安の変化を測定する。

2.4 アンケート調査項目

映像提示前後に以下のアンケート調査を行った。

情動尺度 (Profiles Of Mode States) POMS (McNail, D. M., Lorr, M., & Droppleman, L. F., 1971) : 65項目からなり、「不安-緊張」、「抑うつ-落込み」、「怒り-敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の程度を測定する。これら6つの得点を加算したものを「総合」値として検討する。回答は、まったくなかったような気がする(1点)~非常に多くあったような気がする(7点)の7件法である。

一般的脅威評価尺度 (Threat Appraisal Scale) TAS (中西, 平井, 福田, 岡崎, 尾崎, 辻本, 1999) : 1因子、8項目からなり、まったく平気である(0点)~耐えがたいほど不安である(100点)の11件法とし、点数が高いほど、ある状況に対して死を連想し、それを脅威と評価する度合いが高い。

対処効力感尺度 (高瀬, 2000) : 12項目からなり、2因子の下位尺度からなる。因子1は、ストレスフルな現実であっても、それをそのまま受け入れられる能力を評価する現実受容能力6項目と、因子2は、物事が自分にとって不利な状況にあっても、それを肯定的にとらえることの出来る陽性思考能力の6項目である。回答は、まったくあてはまらない(1点)~完全にあてはまる(7点)の7件法である。

死の不安尺度 (Death Anxiety Scale) DAS (Templer, D. I., 1970) : 15項目からなり、はい(1点)~いいえ(5点)の5件法とした。もともとDASは、はい/いいえの2件法だが、後にMcMordie (1979) によって7件法に改善され、2件法との有意な内部相関性が得られている。本実験では、被験者がより回答しやすい5件法としたが、オリジナルの2件法と合計点数が等しくなるように調整した。

その他: 被験者の性別、年齢、実験日が記入された。映像提示後のアンケートには、提示された映像の種類と、映像を見た感想の自由記述がなされた。

2.5 実験手続き

被験者は、①学生-実験映像(女性12人、男性10人)、②学生-統制映像(女性11人、男性11人)、③中高年-実験映像(女性12人、男性11人) および④中高年-統制映像(女性11人、男性11人)の4つの群に分けられた。

被験者に対して、実験に対する同意を実験者が口頭で求め、同意書記入後、実験を進めた。次に映像提示前のアンケートに記入させ、回収した後、映像を提示した。映像提示終了後、2回目のアンケートを回答させた。両アンケートとも、記入ミスの確認を被験者に促した。

アンケートになれていないと思われる中高年被験者の場合には、被験者の許可を得て、回収時に実験者が記入ミスをチェックした。アンケート回答時には、倫理的配慮にもとづき、偽名の使用可を教示した。また、映像提示中には、映像に集中するように教示を与えた。実験終了後、実験者は実験終了を宣言し、実験意図を被験者に説明した。

2.6 分析

以下の分析をSPSS 9.0J for Windowsを用いて行った。

<映像提示前の各尺度値の比較>映像提示前の各尺度値が、「実験手続き」の項で述べた各群によって異なるかどうかを調べるために、一元配置分散分析を行った。その中で有意な映像提示前の値に付いては、多重比較を行い、等質サブグループを求めた。

<映像提示前後の尺度値の変化量の比較>映像提示前後の各尺度値の変化量に対して、群ごとに対応のあるt検定を行った。

<情動の変化量におよぼす映像提示前の各尺度値の影響>情動の変化量に及ぼす、その情動値の映像提示前の値、年齢、一般的脅威、対処効力感、死の不安の影響を調べるために、各情動の変化量を従属変数、映像提示前のその情動値、一般的脅威、対処効力感、死の不安および年齢を独立変数として重回帰分析を行った。

<欠損値の処理>欠損値は以下の3つのルールを設定し処理した。すなわち、①欠損値のある設問の平均値をその欠損部分に入力する、②入力する平均値は、「実験手続き」で述べた群内の平均値とする、③3箇所以上の欠損値のある被験者のデータは、その被験者のデータは破棄し、分析に供しない、の3つである。

3. 結果と考察

3.1 映像提示前の各尺度値の比較

Table 1 に映像提示前の各尺度値の分散分析結果を示す。情動の「活気」($F=5.81, p<.05$)、「現実受容能力」($F=5.55, p<.05$) および「陽性思考能力」($F=3.06, p<.05$) が有意で、中高年は学生に比べて有意に高い値を呈した。この結果から、学生に比べて、「強い」中高年像が浮かび上がった。

Table 1 映像提示前の各尺度値の分散分析

		実験映像		統制映像		F値	
		中高年	学生	中高年	学生		
	不安-緊張	M	12.35	13.45	14.68	12.50	.69
		SD	5.20	6.19	5.47	7.36	
	抑うつ-落込み	M	15.52	12.09	18.36	17.14	1.27
		SD	10.10	9.22	8.63	15.88	
	怒り-敵意	M	13.04	12.45	14.82	12.00	.41
		SD	8.18	10.68	7.37	9.61	
情動	活気	M	18.04	14.23	17.59	12.64	5.81**a)
		SD	5.72	4.47	4.40	5.74	
	疲労	M	8.00	10.23	8.77	11.91	1.68
		SD	5.89	7.08	5.26	6.75	
	混乱	M	10.43	10.00	10.95	10.36	.17
		SD	4.33	4.65	4.23	4.88	
	情動総合値	M	77.39	72.45	85.18	76.55	.57
		SD	29.81	35.70	28.66	37.81	
一般的脅威		M	487.83	470.45	469.09	455.00	.30
		SD	117.97	91.86	143.56	104.91	
対処	現実受容能力	M	27.78	22.50	28.68	23.82	5.55**b)
		SD	6.22	6.90	4.21	6.30	
効力感	陽性思考能力	M	33.04	29.77	32.27	28.68	3.06**c)
		SD	6.69	5.26	4.04	5.83	
死の不安		M	7.71	7.94	7.47	7.24	0.32
		SD	2.90	1.94	2.17	2.87	

* $p<.05$, ** $p<.01$

a) 統制-学生, 実験-学生 < 統制-中高年, 実験-中高年

b) 実験-学生, 統制-学生 < 実験-中高年, 統制-中高年

c) $p<.05$ では、等質サブグループに分かれなかった

3.2 映像提示前後での変化

Table 2 に映像提示前後での情動の変化を示す。実験映像を提示された学生の「怒り-敵意」、「活気」および「情動総合値」が有意に低下した。また、統制映像を提示された学生はすべての情動値が有意に低下し、中高年は「不安-緊張」、「怒り-敵意」、「情動総合値」および「一般的脅威」が有意に低下した。

実験映像を提示された学生が情動変化が見られたのに対し、中高年は見られなかった。これは、3.1項で明らかになった中高年の「強さ」が1つの原因であると考えられる。また、統制映像を提示された学生のすべての情動が低下した。これらについては、統制映像選択の妥当性もふくめて次節で論議する。

Table 2 映像提示前後の各尺度値の変化量

		実験映像				統制映像				
		中高年	t値	学生	t値	中高年	t値	学生	t値	
不安-緊張	M	.04	-.05	-1.09	1.42	-1.68	2.21*	-2.27	3.31**	
	SD	4.33		3.60		3.56		3.22		
抑うつ-落込み	M	-.87	.57	.77	-.89	-1.82	1.30	-2.41	2.23*	
	SD	7.28		4.08		6.67		5.06		
怒り-敵意	M	-2.00	2.07	-2.86	4.05**	-2.77	3.14**	-1.86	2.39*	
	SD	4.64		3.31		4.14		3.66		
情動	活気	M	-1.26	.87	-4.23	4.94**	.45	-.47	-2.45	2.82*
	SD	6.99		4.01		4.49		4.08		
疲労	M	1.09	-1.04	-.63	1.56	-.95	1.25	-1.05	2.19*	
	SD	5.03		1.92		3.58		2.24		
混乱	M	-.30	.53	-1.09	1.96	-.68	1.43	-1.73	2.75*	
	SD	2.77		2.61		2.23		2.95		
情動総合値	M	-3.30	.87	-9.13	4.28**	-7.45	2.34*	-11.77	4.56**	
	SD	18.16		10.02		14.94		12.12		
一般的脅威	M	-22.17	1.34	4.09	-.41	-29.55	2.46*	-3.18	.43	
	SD	79.37		46.36		56.27		34.42		
対処	現実受容能力	M	1.09	-1.50	.14	-.32	.48	.36	-.40	
	SD	3.48		3.59		3.14		4.26		
効力感 陽性思考能力	M	-0.39	.58	-.27	.59	-1.09	1.82	-.68	1.67	
	SD	3.24		2.19		2.81		1.91		
死の不安	M	.08	-.44	.20	-1.03	-.21	.68	.08	-.64	
	SD	.82		.92		1.41		.58		

*p<.05, **p<.01

3.3 情動変化量におよぼす映像提示前の各尺度値の影響

Table 3 に情動変化量を従属変数、映像提示前の各尺度値および年齢を独立変数とした重回帰分析結果を示す。実験映像では、「不安-緊張」($R^2 = .30, p < .05$)、「抑うつ-落込み」($R^2 = .28, p < .05$)、および「混乱」($R^2 = .42, p < .01$) が有意で、その情動値の映像提示前の値、年齢、陽性思考能力などの影響を受けている。統制映像では、有意な結果は得られず、ほぼ一様な変化であったと考えられる。

Table 3 情動変化に及ぼす当該情動値の提示前の値、年齢、一般的脅威、対処効力感、死の不安の影響

		従属変数						
		不安-抑うつ-怒り-						
独立変数		緊張	落込み	敵意	活気	疲労	混乱	総合
提示前の値		-.47**	-.51**	-.28	-0.39*	-.21	-.31*	-.27
実年齢		.27	.13	.34*	.30	.32*	.45*	.42*
一般的脅威		-.17	-.11	-.23	.19	.05	-.05	-.08
現実受容能力		.04	-.18	-.35	.12	-.38*	-.30	-.25
陽性思考能力		-.43*	-.35	-.16	-.09	-.02	-.45*	-.29
死の不安		.16	.24	.33	-.10	.29	.13	.26
R ²		.30*	.28*	.21	.21	.27	.42**	.24
提示前の値		-.39	-.36	-.42*	-.36	-.25	-.20	-.24
統制年齢		.11	.26	.10	0.42*	.06	.21	.27
一般的脅威		-.09	-.03	-.13	-.10	-.13	-.08	-.09
現実受容能力		.09	-.11	-.07	.15	-.08	.18	.07
陽性思考能力		-.04	-.35	-.34	-.03	-.28	-.15	-.33
死の不安		.28	.01	.10	-.20	.26	.23	.08
R ²		.16	.14	.17	.22	.13	.13	.10

*p<.05, **p<.01

4. 論議および問題点

当初は、実験映像を提示された場合の情動の変化は、統制映像を提示された場合よりも大きいと推測していたが、反対の結果であった。また、中高年は、親や配偶者、その他の重要な他者の死を看取った経験が、学生に比べて豊富だと考えられ、その経験が情動の変化に影響をおよぼすため、中高年の変化は、学生のそれよりも大きくなると推定していたが、これも概ね逆の結果が得られた。このように、当初の予測とは、異なる結果が得られたことについて、以下に自由記述で得られた感想を元に議論していく。

4.1 実験映像提示による情動変化

<学生>実験映像に対する、学生被験者の自由記述の感想は22名中15名から得られ、いずれの感想も、実験映像に対して高い関心を示すものであった。回答記入のあったものについて、実験映像／統制映像、関心あり／なし、に分け χ^2 検定を行ったところ、実験映像のほうが明らかに高い関心が示された($\chi^2=6.97, p<0.01$)。自由記述の感想は、「人生や死、自分の将来のことについて考えさせられた」といった内容のものがほとんどで、このような霊的、実存的な対象に考えをはせることで、「怒り-敵意」や「活気」が減少したものと考えられる。

<中高年>中高年の情動の変化量は全て有意ではなかった(Table 2)。このような結果が得られたことについて以下に議論する。

結果と考察の項では、「活気」、「現実受容能力」、「陽性思考能力」の高い中高年の「強さ」によるものと考えた。ここでは有意にならない原因として、分散の大きさという面からこの結果を議論していく。実験映像を提示された学生と中高年の情動変化量について等分散の検定を行ったところ、「抑うつ-落込み」($F=3.18, p<.01$)、「活気」($F=3.04, p<.01$)、「疲労」($F=6.88, p<.01$) および「情動総合値」($F=3.28, p<.01$) で有意になり、中高年の分散が大きいことが示された。分散を大きくする要因として、中高年被験者自身の持つ多様性、および実験遂行上の問題点が考えられる。

実験遂行上の問題点とは、すなわち、中高年被験者に対する統制されていない実験条件(実験場所、モニターサイズ、年齢)である。そこで、実験場所、モニターサイズ、および年齢を独立変数、情動の変化量を従属変数として重回帰分析を行ったところ、「混乱」のみが実験場所に対して有意であった($stb=-.60, p<.05$)。しかし、「混乱」について、学生と中高年で等分散の検定を行ったところ、有意にならなかった。従って本実験における統制されていない要因の、情動の変化量の分散に及ぼす影響は、重大ではないといえる。従って、中高年自身の持つ多様性が、実験映像提示前後の情動変化量の分散を大きくした原因であると考えられる。多様性はとりもなおさず生物生存の最大の戦略であり、このことから学生に比して中高年の「強さ」を示す実験結果であろう。

<情動の変化に及ぼす、一般的脅威、対処効力感、死の不安の影響>実験映像の「不安-緊張」の変化量は、映像提示前の値($stb=-.47, p<.01$) および陽性思考能力($stb=-.43, p<.05$) から負の影響をうける(Table 3)。すなわち、映像提示前の値が大きいほど、また陽性思考能力が高いほど、「不安-緊張」の低下が大きいということである。実験映像は、実際に一人の人間が死んでいく場面を描写したものであり、いくらその死に方が安らかであっ

たとしても、死は死であり、その時点で全ての意識がなくなってしまうのである。実際に、実験映像「ハービーやすらかに」の中で、ハービー自身が、「死後の世界はなく、死んだらそれでおしまいだと考えている」と述べている。もし、陽性思考能力が低ければ、喪失としての死の面が大きくとらえられ、「不安-緊張」は低下しないか、あるいは増加すると考えられる。「抑うつ-落込み」の変化量は、映像提示前の値のみから負の影響を受ける ($stb = -.51, p < .01, \text{Table } 3$)。「不安-緊張」も前述したように映像提示の値から負の影響を受けている。これは、映像提示前の値が大きいほど低下が大きくなることを示しており、実験映像のような情報が与えられた場合には、「不安-緊張」、および「抑うつ-落込み」が沈静化され、かつ、その範囲が小さくなる、すなわち、「不安-緊張」、「抑うつ-落込み」が最も高い人と、最も低い人の差が小さくなることであり、収束的变化を与えるといえる。なお、「混乱」も映像提示前の値から負の影響を受け ($stb = -.31, p < .05, \text{Table } 3$)、収束的变化をきたすと考えられる。

Oranchakら (1988) は、自身らが開発したモードスケールを用いて、死の不安と、映像提示前後の攻撃性、抑うつ、および一般的な不安の変化量との正の相関を示しているが、本実験においては、相当すると考えられる「怒り-敵意」、「抑うつ-落込み」、および「不安-緊張」の変化量と死の不安との相関は認められなかった。用いたモードスケールの違い、被験者の年齢層、および実験映像の内容に起因すると思われる。とくに実験映像の内容の影響が大きいと考えられる。Oranchakら (1988) は、実験映像として、交通事故の様子を描いたビデオを用いており、どちらかといえば不幸な死、遺族にとって受け入れることが難しい死を描いている。本実験では、安らかな死、遺族にとって十分に受け入れられる死を描いたものを実験映像として用いているので、その差によるものと考えられる。

「混乱」の変化量は、年齢から正の影響を受け ($stb = .45, p < .05$)、陽性思考能力から負の影響 ($stb = -.45, p < .05$) を受けている (Table 3)。陽性思考能力が高い場合は、実験映像のような形で「死」をみせられた場合、それを受け止めることができ、また、自分にとってよりよい方向に考えることができるので、「混乱」が低下することは考えられるが、年齢との関係の原因は定かでない。

4.2 統制映像提示による情動変化

学生のすべての情動値は有意に低下した (Table 2)。このことについて以下に議論する。統制映像提示後の自由記述の感想を、回答のあったものについて、映像に対する関心あり／なし、中高年／学生に分けて、 χ^2 検定を行った ($\chi^2 = 5.56, p < .05$) ところ、学生は中高年に比べて、統制映像に対する関心がかなり低かったことが明らかになった。また、学生の自由記述感想では、「つまらない」といった内容が多く見受けられた。このことから、統制映像は、学生にとって鑑賞するに値しない大変退屈なものであったため、映像提示中は休息状態にあったのではないかと考えられる。休息していたことで、すべての情動の値が低下したものと推定される。

4.3 統制映像の妥当性

映像提示前後の情動の変化、特に統制映像提示前後の変化について、映像に対する関心という面から議論を行ってきた。しかし、本実験においては、「映像に対してどの程度関心を

持ちましたか?」というような直接的な問いをしていない。自由記述感想から関心を読み取ったものである。

実験映像については、いくらかの映像の中から、死に関する情報を含み、かつ、自分のこととして捉えられ、気持ちが悪いなどの付加的な情動反応を喚起しない、という選定基準に従い、実験により選出されたものである。統制映像については、死に関する情報を含まないという選定基準は明らかに満たしている。統制映像の中立性、すなわち、映像を提示しながら何の情報も刺激も与えられない状態を実現すべく、大多数の人にとって関心がない、という選定基準を設けた。しかし、この基準については実験を行わず、推定によって映像を選択した。結果的に、学生被験者にとってはこの基準は満たしたものの、退屈→休息という事態が発現したものと思われた。一方、中高年被験者は学生被験者に比べてやや関心を持って見ていたため、この選定基準は満たしていない。

これらのことから、本実験結果をより精緻に説明するために以下のような実験が必要である。

(情動変化におよぼす休息の影響) 本実験と同一の条件で、映像提示のところを同一時間(20分)の休息を被験者に与える。休息前後の情動値を比較する。

(関心の程度の統一) 例えば、被験者が日常生活において利用する映像メディア(テレビ番組、ビデオ、映画など)で最も関心の有るジャンルを基準とし、実験で提示した映像の関心の程度を評価する。死に関する情報を含まないという条件のみを満たす統制映像候補を複数準備し、各候補について感心の程度を評価し、実験映像と評価が最も近いものを、統制映像として採用する。このような手続きを踏むことによって、死に関する情報の影響と関心の程度の影響が分離される。

4.4 情動以外の変化について

情動以外の項目は、一般的脅威、対処効力感(現実受容能力+陽性思考能力)、および死の不安が含まれる。これらの値で変化したのは、統制映像を提示された中高年の一般的脅威が有意に低下したのみである。これらの特性は、少なくとも本実験においては、個人的特性と考えられる。高瀬(2000)は、対処効力感を個人的特性ととらえている。また、死の不安の実験的研究を行っているOranchakら(1988)も、死の不安を個人的特性ととらえて映像提示前の測定しか行っていない。死の不安を個人的特性ととらえるならば、死の不安を意識して作成され、そして、死の不安との非常に強い相関を有した一般的脅威($r = .67, p < .01$)も個人的特性と考えられるかもしれない。しかし、これらの特性も何がしかの刺激や、ライフイベントによって変化することは十分に考えられる。実際、本実験においても、対処効力感の年齢差が認められた。これは、中高年被験者が、学生被験者に比べて生得的に高い対処効力感を有している、と考えるよりも、後に考察するように中高年の豊富な人生経験により、後天的に獲得されたと考えるほうが自然である。また、死の不安についても、中年と老年では、中年の方が高いとする研究も多く見られる(Gesser, et. al, 1987-88; Keller, et. al, 1984)。これも、老年が中年に比べて生得的に死の不安が低いと考えるよりも、中年以降の様々な人生経験、ライフイベントによって徐々に変化していくものと考えほうが自然である。本実験では、これらの特性が変化することを期待して、映像提示前後2回の測定を行ったが、有意な変化を見出すことができなかった。しかし、上記で考察したようにこれらの特

性も変化する可能性があり、実験的にこれらの特性に変化を与える刺激や情報を見出すことができれば、臨床や教育場面で非常に有用な知見が得られるだろう。

なお、本実験でただひとつ変化のあったのは、統制映像を提示された中高年被験者の一般的脅威の有意な低下であるが、なぜ、この条件において一般的脅威が低下したのかは、現在のところ明らかではない。想像を逞しくするならば、たとえば、パソコンなどの情報機器に対するアレルギー的反応は、学生に比べて中高年のほうが高いであろう。しかし、統制映像の説明はわかりやすく、「これなら私にも扱えそうだ」という思いになり、一般的脅威が低下したのかもしれない。ちなみに情動の「不安-緊張」も低下している。実際、統制映像を提示された中高年の被験者からえられた肯定的な感想には、パソコンはできないが、興味はあった、教わろうと思う、などの記述が見られた。

5. 展望

実験映像は、特に学生に高い関心を持たれ、喪失体験のない彼らにとって喪失シミュレータとしての役割を果たすことができると考えられる。また、中高年は学生に比べて、活気、対処効力感が高く、多様性がある、など、「強い中高年」像が浮かび上がった。すでに自身の喪失体験もあり、強い中高年にとって実験映像は喪失シミュレータとしての役割は果たしえない。しかし、定量測定は行わなかったが、実験映像を提示された中高年のほとんどが、実験終了時に自己の喪失体験を、学生である実験者に語った。このことから、実験映像は彼らの貴重な喪失経験を次世代に伝えさせる動機付けを与えるもの、言うなれば喪失モチベータとしての機能があると考えられる。

従って、本実験で用いた実験映像一死に関する情報を含み、かつ、自分の問題として捉えられ、付加的な情動反応を喚起しない一を提示することは、若年層にとっても中高年層にとっても重要な意味を持つものである。

<引用文献>

- Abdel-Khalek, A. M. 1997, Death, anxiety, depression, *Omega*, 35, 2, 219-229.
- Abdel-Khalek, A. M. 1998, Single-versus multi-item scales in measuring death anxiety, *Death studies*, 22, 763-772.
- Comb, D. C. 1981, The effects of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance, *Death Education*, 5, 75-81.
- Davis-Berman, J. 1998-99, Attitudes toward aging and death anxiety : Aging and death class, *Omega*, 38, 1, 59-64.
- Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T. 1987-88, Death attitudes across the life-span : The development and validation of death attitude profile (DAP), *Omega*, 18, 113-128.
- Keller, J. W., Sherry, D., & Piotrowski, G. 1984, perspective on death : A developmental study, *The journal of Psychology*, 116, 137-142.
- McMordie, W. R. 1979, Improving measurement of death anxiety, *Psychological Reports*,

44, 975-980.

Mcnaul, D. M., Lorr, M., & Droppleman, L. F., 1971, Manual for the profile of mode states, San Francisco : Educational and Industrial Testing Service

中西健二, 平井啓, 福田希美, 岡崎友美, 尾崎勝彦, 辻本和也 1999, 死に関連した脅威評価尺度作成の試み、未公刊

Oranchak, E., & Smith, T. 1988, Death anxiety as a predictor of mood change in response to death stimulus, *Omega*, 19, 2, 155-161.

高瀬明子 2000, 死の不安と精神的健康度の関連性－陽性錯覚理論の観点から, 大阪大学人間科学部卒業論文

White, W, Handal, P. J. 1990-91, The relationship between death anxiety and mental health/distress, *Omega*, 22, 1, 13-24.